

助動詞

論集 日本語研究

論集日本語研究 7

助動詞

梅原恭則編

有精堂

論集 日本語研究 7

助動詞

昭和五十四年二月二十日 初版発行

編者 梅原恭則

発行者 山崎 誠

発行所 有精堂出版株式会社

〒101 東京都千代田区神田神保町一―三九

電話〇三(二九一)一五二一(代)

振替口座 東京 九―四〇六八四

◇落丁、乱丁はおとりかえ致します。

定価 2800 円

3381-400007-8610

(第二回配本)

『論集 日本語研究』刊行に際して

最近におけるほど日本語についての研究が盛んな時代はかつてなかった。日本語研究の歴史は、決して新しいものではなく、特に明治以降においては、科学と呼ぶにふさわしい一分野を形成してきたが、近時における活況は、まさに未曾有のものである。日本語研究に携わる人の数も、その人たちによって公にされる論文、著書の数も、急激に増加しつつあり、研究の対象、方法、分野などもおびただしく多様化している。それは、日本語ブームと呼ばれるような一時的流行的な現象ではなく、学問全体の中において言語学が重要な位置を占めるものであること、そして、日本人にとって言語学の中心は日本語研究であることなどが正しく認識され、かつ、国語教育において言語的側面が正当に重視されるようになってきたことに基つくところの、必然的な結果であるといつていい。

こういう状況のもとにおいて新たに日本語研究を志そうとする場合に遭遇する困難点の一つは、これまでの研究に多大な役割を果し、かつ今日においても十分に学問的意義を有するところの論文で、容易に入手できないものが多いということである。新しい研究が従来の研究の成果の上に構築されなければならぬものであることは言うまでもない。そういうことから、このシリーズには、高い評価を得ていくすぐれた論文で入手の困難なものを掲載するように努めた。一方、最近陸續と刊行される雑誌や紀要の論文また著書などのすべてを読破することは不可能に近い行為である。このシリーズには、古い論文を採録するだけでなく、最近の新しい論文をも精選して掲載し、新しい日本語研究の情報センターという意義を持たせ、効率的な研究に資するようにも努めた。各巻に掲載したい論文は多いが紙幅に制限があつて許されない。巻末に解説と参考文献の欄を設けて、その欠を補うことにした。

なお、このシリーズの各巻は、大学の教室などにおいて論文講読のテキストとして用いられることも配慮して編まれている。どうかご利用願いたい。

凡 例

一、本巻には、明治時代以後における、助動詞に関する論文十九篇を収録した。論文の排列は原則としてその論文の執筆された順序にしたがったが、便宜上、助動詞全体に関するもの、古語助動詞に関するもの、近代語助動詞に関するものに大別した。

一、各論文は、なるべく、もとの論文の表記法に忠実な形で再録するように努めたが、単行本としての体裁などの上から、次のような改変を加えた。

(1) 仮名遣いはもとの論文のままとしたが、漢字の字体は新字体に統一した。旧字体で書かれていたのを新字体に改めた論文は、山田孝雄・松下大三郎・金田一春彦・濱田敦・塚原鉄雄（敬称略。以下同じ）の論文五篇である。

(2) 故人などの論文で、明らかに誤記あるいは誤植と思われる箇所は、編者の責任において、正しいと思われる表記・表現に改めた。

(3) もとの論文中にある図版・表などを指示する語句で、本巻の組版上必ずしも同じくできなかったものは、例えば「次頁の図」を「下図」のように、また、もとの論文の「〇〇頁参照」とあるものは本巻の頁と段に従って参照頁の指示を改めたものがある。

(4) もとの論文の仮名で、アンチック体を使用しているものはゴチック体に改めた。

(5) もとの論文の末尾に執筆者の所属などが付記されているものがあるが、削除した。

(6) 単行本からの再録の場合、題名の「第何章」や「第何節」などは削除した。なお、第何章の第何節かなどは、各論文の末尾に添えた、もとの論文の所在の注記や巻末の解説を見れば明らかになるように配慮した。

(7) 図版・造字などは、もとの論文に模して新たに作成した。

一、本巻では、もとの論文が縦組のものは縦組、横組のものは横組とし、横組のものは解説の前にまとめた。組み方は、縦組が本文8ポイント活字29字×24行×2段、横組が本文8ポイント活字41字×34行×1段で統一した。

一、それに伴ない、見出しのつけ方を、番号数字などの一部を除いて統一した。

一、もとの論文で（ ）に囲んだり、――や……を付した箇処は、必ずしも同じ体裁ではないため、本巻では、地の文では本文と同じ8ポイント、改行引用文内では7ポイントとしておおむね統一した。

一、もとの論文の本文中に「」で引用した以外の、改行引用文は原則として二字下げに統一したが、組版などの都合により、そうでないものもある。出典は（ ）内に6ポイント小字で示した。

一、漢字の用い方、送り仮名などは、誤植以外一切もとの論文のままとした。

一、再録するにあたり、執筆者によって誤植の訂正や若干の加筆がなされた論文がある。加筆については次の通り。金田一春彦Ⅱ単行本「」を『』に訂正、小松登美Ⅱ付記を加筆、春日和男Ⅱ表記の一部を訂正・地の文及び註内の書名に「」を補入・用例の一部を補訂・論文末参照著書を補入、長船省吾Ⅱ促音小文字表記に、竹岡正夫Ⅱ表の排列を訂正・用例の一部を補訂・追記を加筆、中西宇一Ⅱ追記に加筆、城田俊Ⅱ補注を加筆、奥津敬一郎Ⅱ付記を加筆。

一、各論文の末尾に、（ ）に囲んで、もとの論文の所在を注記した。

一、解説は編者が執筆し、各論文について、内容・概要・評価されるところ・問題点・研究史上の位置づけなどを簡略に解説した。

目次

〈助動詞研究の歴史〉

複語尾……………山田孝雄…七

動助辞・総説……………松下大三郎…七

不変化助動詞の本質……………金田一春彦…三

——主観的表現と客観的表現の別について——

助動詞の相互承接についての構文論的考察……………北原保雄…三

「あり」の構文的機能について論じ、

助動詞の構文論的考察に及ぶ……………北原保雄…八

〈古語助動詞の研究〉

上代に於ける願望表現について……………濱田敦…一〇六

助動詞めりの起源について……………小松登美…三三

推量の助動詞——その国語史的考察——……………塚原鉄雄…二五

指定辞「たり」雑考——特にその発生と用法と……………春日和男…二四

助動詞「つ」と「ぬ」——アスペクトの観点から……………長船省吾…二六

助動詞「けり」の本義と機能……………竹岡正夫…二七

——源氏物語・紫式部日記・枕草子を資料として——

「まし」の意味領域……………山口堯二…二五

「べし」「らし」「らむ」「けむ」について……………阪倉篤義…二六

「べし」の意味——様相的推定と論理的推定——……………中西宇一…二六

〈近代語助動詞の研究〉

「ダ」による述部代用化——展成文法への試み——……………奥津敬一郎…二六(1)

、タ、の意味と機能……………寺村秀夫…二六(19)

——アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ——

願望のタイの前でのヲとガの交替……………大江三郎…二五(52)

「のだ」の文について……………山口佳也…二三

《う／よう》の基本的意味……………城田俊…二六

解 説	梅 原 恭 則・三〇七
助動詞研究参考文献	梅 原 恭 則・三二三
執筆者一覧	三六

複語尾

山田孝雄

動詞存在詞が、その本来の活用のみにて十分に説明若くは陳述の作用を果すこと能はざる場合に、その活用形より分出して種々の意義をあらはすに用ゐる特別の語尾を今仮に複語尾と名づく。

この複語尾と称するものは、口語に用ゐらるゝものとしてはれる、られる せる、させる

ぬない う、よう

てた たい

らう まい

といふあり、文語に用ゐらるゝものとしては

る、らる す、さす しむ

むずざり

たし きけり つぬ たり

べし まじ

といふあり。又古きものにては

まし じけむ

めり らむ らし
等あり。

今複語尾としてあげたるものは従来「はたらくてにをは」又は動辭などいはれたるものなり。これにつきての研究を歴史的に概観すれば、確たる分類をはじめしは富士谷氏なりとす。氏のあゆひ抄中の六倫十二身は実にこの複語尾に該当するものなり。本居春庭は富士谷氏が身の中に入れし「る」「らる」「す」「さす」等を以て用言の語尾と見たること、自他の研究の歴史にいひし所にて明かなるべし。義門はこれを用言の一部とせしが富樫氏に至りてはこれを動辭と称し、大槻氏に至りて助動詞と名づけられたり。現今の文法書には殆どすべてこれを助動詞と称すれど、これらは用言の語尾の複雑に發達せるものなること既にいひし所の如くなれば、単語として取扱ふことは不合理なりといふべきなり。而してこの助動詞といへる名称は英文典の術語の訳語を襲用せるものにしてその名とその実と吻合せぬものなるが故に用ゐるを

避くべきなり。次にこれを動辭と稱するものは「や」「か」「かな」「は」「も」「ぞ」「が」「の」「を」「に」「より」等を靜辭と名づけてこれに對せしめ更にそれらを一括して助辭とするものなり。

この見解は助動詞説よりは、國語の性質に近づきてありといへども、かの所謂靜辭といへるものは吾人の助詞と稱するものにして、他の種の單語の間に介在してそれらの間の關係を示す者なるを以て抽象的なから單語とすべきものなるに、これは用言の語尾にのみあらはるゝものにして、その用言の作用又は陳述の委曲を尽さしむる用をなすに止まれるを以て用言の内部の形体上の變化と見るを穩當なりとすべき性質を有せり。されば、吾人はこれを語尾の複雑に發達せるものにして語尾の再び分出せるものなりといふ意を以て仮りにかく名づけたるなり。而してこれらはその附屬する語尾にも一定の約束ありてその示す意義と共に動かすべからぬ規律あり。

ある用言の活用形とそれより分出する複語尾との連続は緊密にして決して離るべきものにあらず。即ちその複語尾と用言の本来の活用形との間に他の語の入ることは決してなきなり。即ちこの場合にはその複語尾と上の活用形とは一体となりて離れず、その分出せるまゝのものにてはじめて一の用言たるなり。この故に分別書法をとりて各單語を離して記載する場合にもこの複語尾は本幹たる用言の活用形とは決して分ちてかきあらはすべきものにあらざるなり。これらの点は外國語の助動詞と全く性質を異にする点の主たるものなり。

かくの如く國語の複語尾と漢語英語などの助動詞とは頗る性質

を異にするを以てこれらの助動詞と同一列に説くことを得ざるものなり。今これらの点を少しく説かむ。漢語にて助動詞と稱せらるべきものは

可、宜、當、応、須の類（「べし」の意を基として多少の異同あり。）

將、且の類（「む」の意を基として多少の異同あり。）

不、未、非、弗、勿、莫の類（「ず」の意を基として多少の異同あり。）

見、為、被、所の類（受身の「らる」の意を基として多少の異同あり。）

異同あり。）

使、令、命、教の類（使役の「しむ」の意を基として多少の異同あり。）

英語にて助動詞と稱せらるゝものは shall, will, may, can, must, ought 等にしてこの外 be, do, have は動詞としても助動詞としても用ゐらるゝものと稱せらる。これらのあるものは、又我國語の複語尾にて代表しうるものあり。たとへば予想の shall 執意の will 許可の may 能力の can 義務の ought 必然の must 受身の be 過去の have は我が複語尾にてあらはしうることあり。

これを以て助動詞といへば略同一のものゝやうに思惟せらるべしといへども、必しも然らず。既に述べたる如く國語の所謂助動詞と稱せらるゝものは実は語尾の複雑に發達したるものにして動詞の活用形の一部なりとす。この故にその所屬に一定の法則ありて動かすべからざるなり。未然形所屬のものは連用、終止に附屬せず、連用形所屬のものは未然、終止に附屬せぬが如し。又之を本

来の用言との間を離して中間に他の語を介むこと能はざるなり。

この故にこの複語尾附屬したるまゝにて一の用言とみざるべからず。漢語英語の助動詞は一の單語にして、しかも主たる動詞を助くるものなり。而して主たる動詞とは形体上の連結なきものなり。この故に次の如き形は常にあらはるゝなり。

將_レ以求_二吾所_一大欲_二也、(孟子梁惠王上)

I shall soon go.

かくの如き形は決して國語の複語尾にはあらはるゝことなきなり。こゝに於いて吾人は複語尾を説明して次の如くいふことを得べし。

複語尾は用言の語尾の複雑に發達せるものにして、形体上用言の一部分と見るべきものにして、いつも用言の或る活用形に密着して離れず、中間に他の語を容るゝことを許さず常に連続せる一体をなすものなり。

こゝに於いて、この複語尾と用言の本来の活用との關係につきての問題生ず。即ち用言の活用の一の用法として、必要の場合に下に複語尾を分出すといふことと考ふべきが、すべての用言にこの現象の存するものにあらず。この複語尾の分出といふことは動詞、存在詞には存すれども、形容詞にはこの現象全く存せず。これは形容詞としては命令形の存在せざると似たる現象にして、その命令形の存在せざるは既にいへる如く形容詞としては本質に基づく現象たるなり。而してこの複語尾の形容詞に無關係なることも亦形容詞としては本質的の現象なりと考へらる。たとへば受身とか使役とかいふ如き事は形容詞には本質的に起りうべき現象

にあらず。なほ又予想といひ、回想といひ、打消といひ、推量といふ如きものもすべて時間的推移的に屬性を考へての上の現象なるが故に、形容詞にはありうべからぬ現象なり。かくて形容詞以外の用言にこの複語尾の存する所以は、それらの用言は屬性の表現に於いて又陳述の方法に於いて種々の變化を要求し、それらの要求のすべてをその本来の語尾のみにてはあらはし得ざるを以てこゝに複語尾の發達を促したるなり。かくて、それらの表現又陳述の委曲の狀況は即ち國語にありてはこの複語尾にて示し得るものなれば、反面よりいへば、複語尾の存するだけ、國語の用言の表現及び陳述の方法は複雑になれるものといふべきものにして、正面よりいへば、國語の用言の表現及び陳述の方法の形式は用言の活用形及び複語尾の分出によりてあらはさるゝものに限られたりともいふべきなり。

上述の如く、複語尾は元來の用言の活用によりて種々の説明陳述をなしても、それにて十分に意を尽し得ざる場合にその必要に応じて分出せしむるものなるが故に、それは必要な点のみ存在すべき筈のものなり。而して複語尾それ自身が又それ／＼活用をなす必要あり、随つて又一定の活用形を有す。しかも、それらの活用形も亦元來必要によりて起りたるものなるが故に、その必要とせられたる部分のみあらはるべきものなり。この故に本来の用言の活用に比して活用形の不完全なる点少からざるのみならず、それらの活用形の用法もまた局限せること多し。これらは皆必要な部分のみの存在に止まるが故にして、複語尾が不十分なる故にあらざるものなることを予め考へおくべきなり。

複語尾はそれの本幹たる用言の活用形に附随するに一定の規律あり。即ち未然形より分出するものあり、連用形より分出するものあり、終止形（良行変格及び口語にては連体形）より分出するものあり。その本源の活用形につきて見れば、この三様の別あるに止まれり。その三様の複語尾を各につきてあぐれば次の如し。

未然形より分出するもの。（括弧内は口語）

行か る（れる） す（せる）

受け らる（られる） さす（させる）

行か しむ

行か ず（ぬ）（ない） じ

行か む（う） まし

受け む（よう）

連用形より分出するもの。

行き っ（て） ぬ たり（た）

行き けり き けむ

行き たし（たい） たかり

終止形（連体形）より分出するもの。

行く べし べかり らむ（らう） らし（らしい） めり

行く まじ（まい） まじかり

従来の所謂助動詞の説明の方法はそれらの意義を主題としてそれより分類し説明することゝせるもの多し。然れども文法は語を主としてその理法を説く学にして理法を主として語を説く学にあらざるを以て意義を主として語を従とする方法は顛倒せる研究法なりとす。ことにこれらは單語にあらざるが故にこれを切り離し

ては初学者をして殆ど何の意義なるかを知るに苦しましむるに至らむ。これらは既にいへる如く、用言の活用より導かるゝものなれば上にいへる如く活用形の所屬を以て分類する時は最も記憶し易くしてしかも整然と秩序正しく研究するを得べし。その此の如き結果を生ずるはその本性に従へるが故なるなり。

複語尾も亦活用を有す。その活用は多くは用言そのものゝ活用に似たる点あるものなれど、必ずしも然らざるものもあり。今文語につきていへば形容詞の活用に似たるもの、動詞の活用に似たるもの、存在詞の活用に似たるもの、特別の活用を有するものゝ四種に大別するを得べきが、それを細かく別てば「くしき」活用の形をとれるもの、「しくしき」活用の形をとれるもの、下二段活用の形をとれるもの、奈行変格の形をとれるもの、四段活用の不完全なるが如き形をとれるもの、良行変格の形をとれるもの、特別の形をとれるものゝ七様ありとすべし。次にこれを区別して示すべし。

「くしき」活用の形をとれるもの

（行き） たく たし たき たけれ

（行く） べく べし べき べけれ

「しくしき」活用の形をとれるもの

（行く） まじく まじ まじき まじけれ

下二段活用の形をとれるもの

（行か） れ る るゝ るれ

（受け） られ らる らるゝ らるれ

（行か） せ す する すれ

(受け) させ さす さする さすれ

(行か) しめ しむ しむる しむれ

(行き) て つ つる つれ

奈行変格の形をとれるもの

(行き) な にぬぬるぬれぬ

四段活用 of 不完全なるが如き形をとれるもの、

(行か) む め

(行き) けむ けめ

(行く) らむ らめ

良行変格の形をとれるもの。これはすべてある複語尾と「あり」
との複合よりなれるものと考へらる。

(行か) ざら ざり ざる ざれ

(行き) たら たり たる たれ

(行き) たから たかり たかる たかれ

(行く) べから べかり べかる べかれ

(行く) まじから まじかり まじかる まじかれ

以上その活用形の略整へるものにして、次はその活用形の不完
全なるものなり。

(行き) けり ける けれ

(行く) めり める めれ

特別の形をとれるもの、これらは

(行か) ず ぬ ね

(行か) ませ まし まし ましか

(行き) き し しか

(行く) らし

の如く活用するものなりとす。

複語尾には六種の活用形を完く備ふるものもあれど、多くは不
完全にして一種二種若くは三種の活用形を欠くものあり。その六
種の活用形を完く備ふるものは「る」「らる」「す」「さす」「しむ」
「つ」「ぬ」「ざり」の八なり。その形次の如し。

未然形 連用形 終止形 連体形 已然形 命令形

(書か) れ れ る るる るれ るれ (よ)

(受け) られ られ らる らるる らるれ らるれ (よ)

(書か) せ せ する する する する (よ)

(受け) させ させ さす さする さすれ させ (よ)

(書か) しめ しめ しむ しむる しむれ しめ (よ)

(書き) て て つ つる つれ て (よ)

(書き) な にぬぬるぬれぬね

(書か) ざら ざり ざり ざる ざれ ざれ

右のうち「ぬ」「ざり」の命令形はそのまゝにて用をなし、他
の命令形は助詞「よ」を加へて用をなす。

活用形の不完全なるものうち、命令形のなきもの次の如し。

未然形 連用形 終止形 連体形 已然形

(書か) ず ず ず ぬ ね

(書き) たら たり たり たる たれ

(書き) たく たく たし たき たけれ

(書き) たから たかり たかり たかる たかれ

(書く) べく べく べし べき べけれ

(書く) まじく まじく まじ まじき まじけれ
(書く) べから べかり べかり べかる べかれ
(書く) まじから まじかり まじかる まじかれ
右のうち「たり」は古代にては「たれ」といふ命令形用ゐられ
たりしなり。

活用形の不完全なるものうち、未然形と命令形とを欠けるも
のは次の如し。

連用形 終止形 連体形 已然形

(書き) けり けり ける けれ

「けり」には古代には未然形の「けら」も用ゐられたり。

連用形と命令形とを欠けるもの、

未然形 終止形 連体形 已然形

(書か) ませ まし まし ましか

未然形と連用形と命令形とを欠けるもの、

終止形 連体形 已然形

(書か) む む め

(書き) けむ けむ けめ

(書き) き し しか

(書く) めり める めれ

(書く) らむ らむ らめ

(書く) らし らし らし

右のうち「めり」は古く連用形のありしものにして、「らし」は
形には変化なきものなり。

複語尾はその終止形を以て代表的の形として、これをよぶにそ

の形を以てすること本幹たる用言におなじ。

複語尾の活用形の作用はなほ本幹の用言の活用形の作用におな
じ。されど、その作用は、用言の本幹に比して自由ならざる点あ
り。かくの如きはこれ複語尾の不完全なるが為によるものなる
か、これらの事一往、説明しおくべき必要あらむ。複語尾の活用
のうちに欠けたるものあることは前に述べたる如くなり。この事
既にその活用形の作用の存在せぬことを示すものなるが、活用形
の存在せらるうちにても或る作用の欠けたるもの少からず。たとへ
ば未然形は接続助詞「ば」に接する外「す」「む」などの複語尾
の分出するものなるが、「る」「らる」「す」「さす」「しむ」等
はこの作用あれど、「す」「べし」「まし」等の未然形にはこの複
語尾の分出する作用なきが如く、又連用形は下に用言に連ぬるこ
とをうるものなれど、「ざり」にはこの作用なし。かくの如き現
象の存するはこれ複語尾の本質に基づくものにして複語尾が不完
全のものなりといふことを得べきにあらず。即ち、これは必要
なる点のみが発達せるものにして必要とせぬものを理論的につくり
出したるものにあらねばなり。さればこれらは複語尾が不完全
なる為に生じたる現象にあらずして、われらの用言操縦上必要なる
点のみがあらはれたる結果にして、その他の点は語法上必要の無
き為に発達せざりしに止まるものなれば、くれぐれも誤解すべ
からざるなり。

複語尾の各活用形には、又その活用形に属する複語尾を分出す
ることあるものなり。即ち一の複語尾を分出せしめてもなほ意義
を十分にあらはし得ぬ時は更にその下より他の複語尾を分出せし

めてその意義を完くすることあるなり。

この時にはその複語尾の未然形には又未然形所屬の複語尾附随し、連用形、終止形にも亦連用形、終止形所屬の複語尾附随す。その例次の如し。

丘上の老松は行平の月見の松と名づけられたり。

かばかりの怒を忍びかぬる汝とは思はざりき。

しかれどもこれらの所屬は前にいへる如く、用言の本幹とすべて同様なるといふべからずして不十分の点少からず。それらは下に自然に説く所あるべし。

上の例は複語尾二個の連続なるがなほ三個以上の連続せるものあり。それらも亦各活用形よりその活用形所屬の複語尾に連ぬるものにして一定の法則ありて動かすべからず。それらの例早く母に別れ祖母の手に教育せられたりき。

殿下は御課業了らせられて雪中に還啓あらせられぬ。

多大なる効果あらしめざるべからざる念愈切なり。

やがて之を印に彫らせられきとなり。

この児才ありいかにも師を扱びて学ばしめらるべし。

不十分ながらも漢文を用ゐしめたりき。

人をして殆んど蕭条の氣に堪へざらしめむとす。

その勢実^に当るべからざりき。

さまざま習はせられたれど何一つおぼえず。

以上あげたる如く、一の複語尾より他の複語尾の分出する状態は本来の用言の活用形より複語尾の分出する現象と同じ。即ち形容詞の形を有する複語尾

「たし」「べし」「まじ」「口語の」「ない」

の類にはその下に複語尾の分出すること無きものなり。更に又

「む」「らむ」「けむ」「き」「す」「じ」「らし」

の類も、その下に他の複語尾を分出せしめぬものなり。されど

「る」「らる」「す」「さす」「しむ」「つ」「ぬ」

の類は下に複語尾を分出せしむること盛んにして、又「有り」の複合より生じたる複語尾

「ざり」「たり」「べかり」「まじかり」

の類も然るべき複語尾を分出す。但し

「めり」「けり」

は古は複語尾を分出せしめたれど、後世は分出せしめず。

複語尾の多数のつながりの極限は如何程なるかといふことは實際上の問題にして、理論上の問題にあらず。されど一般に、他の複語尾を分出せしめぬ複語尾のあらはれたる時に分出は終息する道理なり。

複語尾は文語と口語との間に著しき差違あり。その差違の要点は次の五項なり。

- 一 意義用法のかはれるもの
- 二 形のかはれるもの
- 三 活用形のかはれるもの
- 四 文語になくして口語にのみあるもの
- 五 文語にのみありて口語になきもの

以上差違の委曲は、各論に至りて説くべし。

複語尾は独立の語にあらねば、之を単独に説くこと難し。又こ

れを区分するにも、具体的にはその所属の活用形よりして區別すべきこと既に述べたる所なり。かくの如くなれば、複語尾をば意義若くは性質の上より分類することは不可なる事か、若くは可能なる事かといふに必ずしも然らず。一旦、複語尾といふものゝ全体にわたって具体的知識を有したる以上、それら個々の複語尾を論ずるに及びては勢、おのづから、それらの性質にも論及する必要を生ずべく、随つて、それらを性質によりて分類することは決して不可なるにあらず。又さる分類は決して不可能なる事にもあらず。たと分類をなすといふ以上、その事は合理的ならざるべからず。漫然と列挙するが如きは学問上の分類といふことを得ざるべし。然らば如何に分類すべきかといふに、こゝにもなほ先づ、その分類の標準を定めて而して後に之によるにあらずば、学問上の分類とはいふべからざらむ。今、複語尾といふものを一般的に考へ見るに、これは元來、その複語尾の附随せぬ本来の活用形の用法を基として、その足のらぬ点を補充するを本旨とするものなるが故に、常に、その本来の活用形の用法と對比して考察せざるべからざる筈なり。さりながら、それは複語尾にてある以上、いつの場合にてもかゝる見地より觀察することを要するものなるが故に單にこれのみを以てしては分類の標準は立つべきにあらず。ここにそれら複語尾が、用言の如何なる点の用法の補助をなすかに眼を著くれば用言には既に屢いふ如く、属性と陳述の力との二要素の包含せられてあること明かなれば、こゝにこの二を以て分類の標準として、先づ、次の二に大別を施すことゝすべし。

一、属性の表はし方に関するもの

二、陳述のし方に関するもの

この二大別を生ずるは、上にいへる如く、用言の本性を因とし、用言の本幹と複語尾附随のものとの對比を縁としたるものなり。即ち用言の本幹たる第一語尾はその属性の直接に作用せること、又その陳述の單純に行はるゝ場合をあらはすが、ここにその属性の直接に営まれざるものをあらはす必要、又はその陳述を委曲になすべき必要生じ来る。この際にあたり、之をいひあらはすには複語尾の分出によらざるべからず。かくて用言の要素は属性と陳述の力との二者なるが故に、これらを助くるものにも亦、二者の区分を見るに至る。しかも、この二者は、それら用言に本來固有するものなれば、この二者は必然的に区分せらるべき理由あること明白なり。

さてその第一の場合を見るに、その複語尾のつかぬ用言が属性の單純なる直接の表現をなす用をするに止まるが、その属性の表現が複雑性のものにして、間接性を帯びたる表現を要する場合には用言の本来の活用形のみにてはあらはし得ざるを以てこゝに、

書かる。 受けらる。

の如き形を以て受身とか能力とかいふ表現法をなし、

書かす。 受けさす。 書かしむ。

の如き形を以て使役といふ表現法をなす。これらはすべてその属性の表現法に関するものなり。従つて古來、これらの複語尾の分出したるものが、なほそのまゝ一の用言と認められたるなり。その理由はこれらが、属性表現の相の違ふのみにして用言としての属性には少しの変動をも与へぬものなるが故なるのみならず、こ